

水の哲学

トルストイ

「文学と科学は パンと水のようなものである」

ロシアを代表する世界的文豪のレフ・ニコラエヴィッチ・トルストイ（1828-1910）は裕福な伯爵家の四男として生まれた。カザン大学を中退して故郷のヤースナヤ・ポリャーナに戻り、大地主の息子として農民の生活改善を試みようとしたものの失敗に終わる。1854年にクリミア戦争に従軍し、そのかたわら発表した処女作『幼年時代』が評判になって小説家としての道を歩みはじめた。退役後は故郷で農民の師弟の教育にあたりながら旺盛な執筆活動を展開し、ロングセラーとなった『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』などの大作でいまも文学史から消えることのないビッグネームとなっている。

世界に影響を及ぼした伝道者

人間のあるべき生きかたを問いつづけたトルストイの作品は人道主義、非暴力平和主義、キリスト教的博愛主義などと呼ばれる独自の思想的立場と切り離して論じることはできない。彼は戦争や専制政治や農奴制に異議を唱えた筆鋒鋭い思想家としても世界的な影響を及ぼした。

それは日本でも例外ではなく日露戦争の勃発に際して1904年にロンドン・タイムズに寄稿した

非戦論は大逆事件で処刑された幸徳秋水らが発行する「平民新聞」に掲載され、のちに白樺派の指導的作家となる武者小路実篤や歌人の石川啄木に衝撃を与えた。キリスト教徒の知識人として知られる内村鑑三の無教会主義や反戦論はトルストイの著作で培われた。封建制から解放される新しい女性像を描いた有島武郎の長編小説『或る女』も『アンナ・カレーニナ』の悲劇に深く触発されている。

いわば生きることと書くことを乖離なく一致させようとしたトルストイは理想と現実のはざまで苦悶するリベラルな文学者たちの規範的な存在となった。キリストの人間愛をみずから実践しよう



としたトルストイはその膨大な作品を通じて宗教的伝道者としての使命を果たそうとしていたのかもしれない。

ストイックな聖者への道を歩む

表題の「文学と科学はパンと水のようなものである」（『芸術とは何か』）はトルストイの信条を寓意的に表現した言葉とっていいだろう。文学は精神的なものの象徴、科学は物質的なものの象徴と解釈することができる。

さらにこれをパンと水にあてはめると、形のあるパンは物質的なものの象徴、形のない水は精神的なものの象徴と見做される。パンはそれだけで食べられるし、空腹を満たし、生きるための欠かせない糧となる。しかし水がなければ喉は渇き、深く味わうことができず、十分に咀嚼することもできない。

なによりも精神的なものを重視したトルストイはキリストの人間愛のない物質文明への苛立ちを隠さない。それは「人生とは、とどまることなき変化である。つまり肉の生活の衰弱と霊の生活の強化・拡大である」（『読書の輪』）といった言葉からもストレートに伝わってくる。

晩年のトルストイは中国の孔子や老子の哲学に傾倒し、自給自足の生活を試みつつ飲酒・喫煙をやめてベジタリアンになった。長い顎ひげを生やし、質素な野良儀をまとったのもこの時期だ。

こうした極端なまでのストイックな生きかた



はトルストイが物質的な欲望を超えた聖者への道を本気で歩もうとしていたことを物語っている。

長く遠い旅の終着駅

裕福な暮らしに加え、世界的な名声を獲得したトルストイはそれでも精神的に満たされることがなかった。彼が望んだのはシンプルな人間愛で結ばれた生活・文化・社会であり、欲望にあふれた現実とはほど遠い状態だった。

トルストイはついに私有財産を否定し、みずからの莫大な富を放棄しようとした。しかしそれは妻ソフィヤとの関係に破滅的な危機をもたらし、衝突するたびに彼は家出を繰り返すようになった。妻の立場からすればトルストイの行為は自分勝手な妄想の産物に過ぎなかっただろう。

真実の愛を求めたヒロイン・アンナが破局への道をたどる『アンナ・カレーニナ』の「すべての幸福な家庭は互いに似かよっているが、不幸な家庭はどれもが、それぞれの流儀で不幸である」という有名な冒頭の一節は家庭生活におけるトルストイ自身の率直な心情を吐露したものにほかならない。

トルストイは1910年11月に最後の家出を決行した。小さな駐車場のアスターホヴァで悪寒に見舞われ途中下車し、肺炎で苦しんだのち駅長官舎で息を引き取った。

孤独な精神の遍歴者の最期を象徴するような長く遠い旅の終着駅となった。（高倉）